
「言葉」にこだわる

さ東・志度中 高 嶋 結 衣

国語のおもしろさとは何だろう。

教員 4 年目の今、考えるようになった。「好き」とか「嫌い」ではなく、「おもしろさ」と言われると少し難しい。学生の頃は、国語がおもしろいとは感じたことがなかったように思う。

「どうして先生になろうと思ったの？」と、よく子どもたちに聞かれる。どうも私は、みんなの想像する「先生」らしくないらしい。中学 1 年生の 2 学期、赴任してきた体育の先生がいた。怒ったら怖いし、厳しい。でも、中学生のたわいもない話に付き合ってくれる素敵な先生だった。

先生と友人と、下校時に靴箱で話していたとき、何気なく「もう学校来たくないなあ」と言ったことがある。深刻に考えて言ったわけでもなく、ただ、部活動でトラブル続きだった日々への愚痴のようなものだったと思う。それに対して、先生は「学校にはおいで、話ならなんぼでも聞いてあげるけん」と言った。その言葉がとても嬉しかった。否定するでもなく、肯定するでもなく、でも寄り添ってくれている気がしたのだ。そんな先生のようになりたいと教員になった。国語科を選んだのは、得意だったからだ。

国語のおもしろさを明確に感じるようになったのはごく最近だ。

1 年生の教材である安東みきえ著の『星の花が降るころに』。描写を丁寧に読んでいくと、子どもたちは物語に惹きつけられる。「戸部くんは、『私』のこと好きなんちゃん!？」と盛り上がる。そんなことは、どこにも書いていない。戸部くんの行動や言葉の背景にある思いを、読者である子どもたちが想像しているのだ。直接的には描かれていない内容を。当たり前のことかもしれないが、そうやって、ひとつひとつの

言葉に注目して、前後の文脈や過去の出来事とつなぎ合わせながら読むことができると、読むことが楽しくなってくる。

単元最後に、物語の続きを書いた。夏実と仲直りする人、戸部くんとラブストーリーに発展する人、三角関係になってしまう人。どれも素晴らしいと思う。まるで自分も物語の中の登場人物であるかのように、楽しそうに書き進める姿は、とても生き活きとしていた。ただ内容を書くだけではない。セリフの文末だけでさえも悩み、情景描写を描き、「物語のその後」を創造していく。普段、ワークシートに書くのが苦手な子どもその日は一生懸命書いていた。書き終えた原稿は、後日名前を伏せていくつか読み上げた。全員が、目をキラキラさせながら聞いていた。次に紡がれる言葉は何だろうかと期待し、驚き、笑い、感心する。クラス全員が、「言葉」というものに集中していた瞬間だった。

言葉のひとつひとつにこだわり、大切にすることが国語のおもしろさだと私は思う。大きな違いではないけれど、その言葉を選んだのにはきっと理由がある。その小さな違いを見つけることができれば、もっと国語はおもしろくなると思うのだ。だからこそ、生徒のつぶやきをなるべく拾いたい。何気なく言った言葉、授業の気づき、生徒それぞれが感じたことを全体で共有したい。時には全く授業に関係のない雑談に発展してしまうこともあるけれど、生徒と一緒に楽しみながら授業ができればいいと思う。

11 年前、ただ得意なだけだった国語が、今は大好きな教科になっている。ただ、すべての生徒にそうなってほしいとは思わない。でも、せっかく人間は言葉を操れるのだから、大切に、こだわって、使ってほしい。自分の思いにより合った言葉を選択できるようになれば、話すことも書くことも、もっと楽しくなると思う。

一生使っていく言葉だからこそ、言葉を選ぶ楽しさを知ってほしい。私は、子どもたちと「楽しい」を共有できる教員でいたい。